

言葉とは、「人が声に出して言ったり文字に書いて表したりする意味のある表現。感情や思想を伝える表現法」(『大辞泉』)ですが、そうした伝達・表現の手段という枠を超えた力がある、ということを紹介していきます。

言葉が持つ力の凄さ、怖さについて、身をもって感じた経営者は多いでしょう。ちよつとした一言で、まとまりかけていた商談が破談になってしまったり、逆に、経営者の一言が社員を奮奮させ、その後の成長につながるなど、「言葉の力」にまつわる様々な経験があるでしょう。たった一言の「言葉」が人を活かすことも、ダメにしてみまうこともあるのです。まして、経営者の言葉であればその影響力はなお強いものとなります。

企業を繁栄に導くための「言葉」は、やはり前向き、積極的なものでしょう。その大切な要素は、明朗さです。「明朗は、積極的であり、建設的である。憂うつは、消極的であり破壊である」とは、倫理研究所の創立者・丸山敏雄の言葉です。その「明朗さ」とは、いつも笑顔を振りまいていたりとか、皆をよく笑わせるとか、そうした表面的なことよりも、人の内面性、つまり心にこだわりや捉われが何もない状態から生まれる明るさといえます。そうした経営者の明朗な心から発する言葉が、事業をより良い方向に導いて、社員を成長させるのです。

では、心を明朗化していくためには、どのような実践があるのでしょうか。例えば「まず何よりも、朗らかな声

7月のテーマ | 言葉の力



明朗で前向きな言葉が  
会社を繁栄へと導く源泉である

を出す、言葉を出す、言ってしまう、表現する。上を向く。空を仰ぐ。胸をはる。腰をまつすぐにのばす(『人類の朝光』)というように、日常の行動を積極的に変えてみるのが、自身を明朗にしていくなための近道でしょう。さらに、内面的な実践に目を向けると、身辺に起こることを肯定し受容することがあります。「万境に順応してそのまま受け入れる」ところに、生成発展の根本がある。「大きな発動は、大きな受容によつてはじめて可能である」(『歓喜の人生』)というように、経営者としてより力強くエネルギーを発揮していくためには、受容する力を高めていくことが重要となります。

身の回りに起こることを肯定的に受容する実践として、職場や日常生活において、他人から呼ばれたら「ハイ」という返事の実践があげられます。こうした実践を重ねながら、何事も肯定し受容する「受けつぷり」に磨きをかけ、何事も「これがよい」と受けきる心をつくることで、自身の明朗さを高めていくことができるのです。

企業を経営していくには、人・物・資金などを上手に運用していくことが重要です。企業によつては、それらは、なかなか十分に得られずに、限られた状況で、活かしていかなければならないでしょう。足りなければ足りない工場の工夫が求められます。ならば、まずは現状を受容し肯定する前向きな「言葉」を経営者が積極的に発していくことが、社員のより良い成長につながり、企業の繁栄に結び付くのではないのでしょうか。